

気流法ひかりの武 体験者の声

佐川先生と 気流法坪井師範

作家、高橋三千綱氏。氏は少年時代は剣道に打ち込み、高校時代個人戦全国準優勝。芥川賞（78年）を得た『九月の空』はその剣道体験が色濃い。7～8年前から 気流法に参加。ゴルフに精通しアマチュアプレイヤーとしても著名。以下は氏のホームページの日記から高橋氏の公式サイト <http://homepage3.nifty.com/michitsuna/>

月 日 パーゴルフの取材で富士駅までいく。途中横浜線で新横浜で降りるところを乗り越してしまい、こだまを一台遅らせてしまう。リバー富士の小川氏と学研の後藤氏が心細そうに待っていた。本を読んでいて乗り過ごしたといっても信じてもらえそうにないので、すまん、とだけいっておいた。木村鉄工所の木村静さんを取材。その後料理屋で夕食。10時10分のこだま最終便で帰る。

月の連休。

連休中は御岳山でメビウス気流法の合宿に参加。これは身体の中に流れる気流を感じとらえるというもので、気功とも太極拳とも違う。かって佐川幸義氏より大東流合気武道の指導を数回だけ受けたことがあるが、メビウスの坪井香讓師範から受ける気合いも同じものを感じる。佐川先生は「透明な光」と表現していた。坪井師範は「光の武」。両方を体験している者としては、これは究極の武道であると感じる。佐川先生には触れた瞬間飛ばされた。坪井師範にも腹に乗った瞬間飛ばされた。両者とも肩にまったく力が入っていなかった。横隔膜あたりに気が集まっている感じだった。

今回は居合い（註1）をした。真剣をとっての稽古はつらく、きつかった。だが、どうしても肩に力が入ってしまう。メビウスで抜く練習をしているが、たぶん3年間はダメだろう。しかし、2年前の合宿で坪井師範から受けた講議の内容に刺激され、『空の道』（註2）が完成できたという事実もある。いつかもののできるかもしれない。そうなれば、指に触れただけで、相手を飛ばせるのだ。うーん。すごいぞ。どうして柔道家がメビウスに目を向けないのか分からない。たぶん分からないから蔑視しているのだろう。そういえば大東流の佐川先生の弟子で筑波大学の数学教授の木村達雄氏が、オリンピック候補の柔道選手を片っ端から投げ飛ばして、全員を自信喪失にさせてしまったことがあった。木村達雄氏を講談社に私が紹介したことで出版されることになった「透明な力」（講談社）は7版になっているという。坪井香讓師範が自ら書いた「創造する知・武道」（BAEジャパン）もどんどん売れてほしい。

（註1）これは一般でいう居合いというより古太刀の型である。（編集部）

（註2）江戸時代末期の剣豪、男谷精一郎の伝記小説、'04年夏集英社より刊行。（編集部）

左の文中に出てくる技
受けは別の人



しっかりと絞めてくる



一瞬 吹き飛ばされる